

平成二十七年七月吉日初版作成

真の言霊を発し、宇宙の法則に乗る（続）

高嶋 善三郎

目次

宇宙神のみ心に、自己の想念波動を合わせる・・・・・・・・・・	3
常に大調和に向かって進化発展するという絶対法則・・・・・・・・	3
人間は、霊身の働きの一つの枝・・・・・・・・・・	5
その場、その時々に応じた力を出してゆく・・・・・・・・・・	6
言葉を通して、実在界の言（光）の中に昇華してゆく・・	6
救世主としての意識となる段階になった・・・・・・・・・・	8

お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構です。お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせ致します。

(電話) 〇四―七二二―三七五二

(アドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

宇宙神の心は、自分の想念波動を口わせる

宇宙の法則に乗るといふことは、とうとういふことなんでしょうか。覚醒するとか、把われがなくなるなどの概念とどう違うのでしょうか。もう少し詳しく説明してくださいという質問がありました。その答えを整理してみまじょう。

覚醒するといふことも宇宙の法則に乗るといふことも、人間の真の救い（魂の救われ）を表す言葉ですが、強いて違いを言えば、前者が神と人間の関係を本心（直霊と分霊）と業想念（霊魂魄）の概念により整理したものに對し、後者は法則の神としての宇宙神と肉体身の概念により整理したものだといえるのではないでじょうか。

『老子講義』の第四講（天地は不仁なり）に宇宙の法則に乗るといふ言葉の解説があります。その要点をみてみまじょう。

宇宙の法則に乗るといふ、端的に言へば、宇宙神の心のひびきと自己の想念波動を合致せしめてゆへに、別な言葉でいへば、自身の自身を主なる存在として、肉体身の自己を後回しにした生活をしてゆへに、いふことが出来ます。

常に大調和に向かって進化発展するといふ絶対法則

まず、宇宙の法則と原理についていふことなんでしょうか整理してみまじょう。

五井先生は、次のように説明されています。「この自然の法則というものは人類にも当然あてはまってゆく。憎めば憎まれる、叩けば叩かれる、とうとういふに、自らの発する想念波動が、他の同様の波動と交流して、自らに同じような事柄となってかえってくる。即ち自分の運命はすべて自分でつくりだすものであって、自分の不遇を他の人の所為にしてしまったりすることは実に愚かしいことなのである。」と。

また重要な原理について、『老子講義』第九講（弊るれば則ち新たなり）に次のように説明されています。

「病氣や不幸や、国と国との間では戦争などという、弊れる状態は、私たちの古い自己の習慣性、古い事物への把われの想念波動が、消されてゆく姿として起こっている。これは、常に自己なり、人類なりを高め深めて、真実の神の子と成し、神の世と成すための、神の心としての新陳代謝の原理なのである。」

宇宙科学的に言へば、この地球世界も精神と物質の調和によって成り立っているが、この精神と物質はそれぞれの宇宙子（波動）によって構成されており、常に新陳代謝して、瞬々刻々古いものと新しいものが代ってゆへに、いふことが出来る。

この原理、即ち神のみ心としての新陳代謝の原理は、五井先生が『消えてゆく姿で世界平和の祈り』のみ教えとして示されたものです。

「この原理を知らないで、いつまでも古い自己や事物には扱われていると、その古い自己なり、事物なりを消し去る為に、新しい宇宙子が次々と宇宙心から送りこまれてきて、嫌でも応でも、新陳代謝させられてゆくのである。」と五井先生は解説されています。

この原理について別の角度から、昌美先生は、『神示 1997年5月18日(日) 富士聖地における「人類即神也の印による世界各国の平和の祈り」の参加条件』において次のように、解説されています。

「宇宙究極のエネルギーは、人間を通過せず、今生に現れることは絶対にありえない。人間の肉体は、神に似せられて作られし極めて高度なる組織体であるため、宇宙神そのものの至高のエネルギーを媒体におさめ、知覚し、肉体のヴァイブレーションと合体し、変形させ、それによって、全人類に対して神の無限なるすべてを表現し示してゆく。」

さらに、「絶対なる法則は常に大調和に向かって進化発展しつつけており、人類がもたらした否定的想念、暗黒想念をそのままいつまでも蓄積しつつけ、人類自らがそのことにまだ気づかずにいれば、法則そのものが介入して、人類に真理を知らしめんとする。すると、蓄積された彼らの否定的、暗黒想念のヴァイブレーションが彼ら自身に自然発生的に反射する仕組みになっており、よって、戦争、闘争、病気、飢饉、天変地変と不調和や破壊が生じ、人類に意識変革を迫る」と。

「この印を組んでいる瞬間こそ、すべて混乱し不調和しつつけている現象界より脱け出し、神の大きいなる平安と祝福の中におり、宇宙神の光を今生に降ろしているのです。」

宇宙究極のエネルギーが人間を通過せず、今生に現れることは絶対でありえません。神の無限なるものが人間を通さずに顕現することとは決してありません。神の無限なるものを降ろすことのできるのは、全地上を通じて人間の他にはないのです。人間の肉体は神に似せられて作られし極めて高度なる組織体であるため、宇宙神そのものの至高のエネルギーを媒体におさめ、知覚し、肉体のヴァイブレーションと合体し、変形させ、それによって、全人類に対して神の無限なるすべてを表現し示してゆくのです。

人間が真理だと称して信じこんでいる真理とは、人間にとってのみ真理なのです。人間にとって全く都合のよい人間側からみた真理なのです。だがしかし、印を組むことによって絶対なる真理、宇宙の法則が見えてきます。天啓が下るのです。それによって、人類一人一人が真に真理に目覚めてくるのです。これこそが絶対なる真理なのです。

絶対なる法則は常に大調和に向かって進化発展しつつけてゆくものです。宇宙法則は、人類がもたらした否定的想念、暗黒想念をそのままいつまでも蓄積しつつけ、人類自らがそのことにまだ気づかずにいれば、法則そのものが介入して、人類に真理を知らしめんとします。すると、蓄積された彼らの否定的、暗黒想念のヴァイブレーションが彼ら自身に自然発生的に反射する仕組みになっています。

るから浅い狭い肉体頭脳という場所だけを経巡っているような想念や知識をいくら振り廻していても、大宇宙の法則に乗れぬことはできない、大宇宙の法則に乗って生きてゆかなければ、この狭い肉体世界での生き方さえ正しく行じてゆけない」ということであろう。

その場、その時々
に即応した力を出しつゝへ

私たちは、宇宙の法則に乗ると、この複雑なる肉体界においてどのような道をゆくべきなのでしょう。それについてヒントになる五井先生のお言葉があります。同じく『老子講義』の第四講（天地は不仁なり）にそれがあります。

それは「天地のように計り知れない力もちながら、その場、その時々
に即応した力を出してゆくようにしなければいけない。つまり中庸の道
を守って生きてゆかなければいけない。」とされています。

しかし「中を守る」というような行為は、現代のように社会国家の情勢が複雑になっている時代ではとても難しいので、中を守るなどという言葉をよきにもってこないで、先ず中を守るような心の状態に、自然
になり得る道先ずつけてやるのが必要である。

その道が、世界平和の祈りの道なのである。世界平和といふことは、これは勿論大調和そのものである、宇宙神の心と全へ一つのひびきを
もっており、人類等へ望むところであり、右にも左にも片寄らな

い、中を守る道となるのである。

祈りによる世界平和運動こそ、真の中庸の道なのである。ですから、あまりむずかしく理論的にどうだ、こうだと 聖人の教えを考えるよりも、祈り一念の生活を取り入れてしまった方が、すべての聖人の教えが生きてくるのである。」と説明されています。

言葉を通して、実在界の言（光）の中に昇華してゆへ

言葉について、説明してくださいという質問がありました。その答えを整理していきたいと思います。

広辞苑には言葉に宿っている不思議な霊威。古代その力が働いて言葉通りの事象がもたらされると信じられたとあります。

日本は言魂の力によって幸せがもたらされる国「言魂の幸ひ国」とされ、万葉集に「志貴島の日本（やまと）の国は事霊の佑（さき）くありぞ」（柿本人麻呂）などの和歌があります。

昌美先生は、「天地を動かす 真の言霊」『白光誌』2011年10月号）において、次のように言及されています。

「世界中に経済危機、紛争危機、大自然危機、その他種々さまざまなる危機が勃発している。・・・がそれすらも現象世界に現れる以前、即ち幽界においてはもっともっと凄まじき状況であるだけに、すべての大難を小難に変容させてゆく神人たちの祈りと言霊の成果には、目を見張る思いがしている。」(略)

世界には神人たちのように世界の不調和、混乱、未曾有の災害に対して祈っている人々も実に多いのである。

しかし、その中でも言霊の偉力に勝るものはない。言霊の本来の働きは、**天地を動かすほどのものである。**

(略)

天地を動かすほどの偉力を発揮させるためには、**自らが自らの神、即ち「我即神也」に對する信をもっともっと強力にし、信を固め、一瞬たりとも不安感や疑いが出ないように習慣づけることが大事である。**(略)

そのためには、まず何回、何十回、何百回、何千回、何万回と真理の言霊を発し続けることによりいつの間にか自分自身が自らの神性に気づき、目覚め、強く信ずることができるようになるのである。「と。

2012年と2013年の7月のこの神事を通じて、私たちは「すべては完璧、欠けたるものなし、大成就」の真の言霊を発し、昌美先生のこの指導のもとに宇宙神の光を私たちの頭頂に降ろしていただき、私たちの言霊を天に刻印していただきました。

そしてついに、2014年、新年祝賀祭において、私たちは「宇宙神の根源に汝らの魂は直結した。」という五井先生のメッセージを、昌美先生を通していただいたのです。

さらに2015年1月、呼吸法のやり方について、昌美先生よりご指導いただき、宇宙の光を自分の周辺に降ろし、「一瞬たりとも不安感や疑いが出ないよう」に心の整理をすめようにより、私たちが発する真の

言霊は、偉力がますます発揮していく足掛かりを得ました。

この真の言霊の偉力をさらにヘルマニッシュするために、参考になる五井先生のお言葉があります。それをみてみましょう。

五井先生は、『著書』『靈的な存在としての人間』の中で、「日々使っている言葉や想念波動を通して、実在界の言(光)の中に昇華してゆへように」と次のように解説されています。要約・整理したものをみてみましょう。

聖書ヨハネ伝に「太初(はじめ)に言(ことば)あり、言(ことば)は神と偕(とも)にあり、言(ことば)は神なりき。この言(ことば)は太初(はじめ)に神とともに在り、万(よろず)のものこれに由りて成り、成りたる物に一つとして之にたよりて成りたるはなし。之に生命(いのち)あり、この生命は人の光なりき」の行があります。

この行の中にあるこの言(ことば)は、**一口で言えぬ、ひびきであり、光の波動であり、この宇宙創造を成し遂げていたのであり、現在も成し遂げつつあるのである**と言われているのです。そして、「この言(ことば)が現象世界、枝葉の世界に降ろしてくると、言葉となっていく。この言葉の世界は**想念波動の世界と、普通使われる、人間の声帯を振るわせて出てくる言葉の世界との二種あり、この二種の世界は別々に活動している時と同じ世界で活動している時とがある。**これらの世界は、言(ことば)が実在の世界、光明そのものの世界とすれども、現象の世界とどういふことになる。人間はどこらの世界でも活動していると言われているのです。

想念波動と言葉の世界から、言(ことば)の世界へ自己の意識を投入

してしまふ。即ち想念や言葉の世界を空にし、無為にし、神様に全託するにしよう。真実の言（ことば）、光そのものの言（ことば）が心身から溢れてでてくる、即ち実在の世界の様相そのものが、その人の心身に現われて、神仏そのものの人格になってくる、というのが宗教の極意であり、それが釈尊の空、老子の無為、浄土門やキリスト教の全託の境地と言われているのです。

そして、私たちが毎日使っているこの言葉というものの中には、想念波動のひびきも、実在の世界の言（ことば）光（のひびきも混じっており、得てして人々は、汚れた業想念波動の言葉を使いたがるが、せっかく神様が、光輝く平和な実在界を言（ことば）のひびきをもってつくって下さっているのだから、私ども人間は、日々使っている言葉や想念波動を通して、実在界の言の中に昇華してゆく必要がある。また、実在界に、言葉や想念の元になる光明そのものである言（ことば）があるということは、有難いことで、善い言葉や、善い想念をたどってゆけば、実在世界の神のみ元にたどりつけるとして、具体的に昇華していく言葉使い方を示されています。

あの馬鹿野郎という言葉や、あの人の天命が完つされますように、と変えてゆき、この世に平和なごときでない、地球はもう駄目なのだ、という想念波動を、悪いものごととはみんな過去世の神のみ心を離れていった誤った想念行為の消えてゆくために起こっていることなのだ、消えてゆくに従って必ずよい地球世界になってゆくのだ、というように明るい想念になって、世界平和の祈りの中にもってゆく、というように、実在界の光明につながってゆく生き方を示してゆくことが大事である。

それには常に、言葉の使い方や勉強し、想念波動の在り方に気をつけて、常に常に、神のみ心に叶う、言葉使いや想念波動にしてゆかねばならない」と言われています。

私たちは、このお言葉の中にある「常に、言葉の使い方や勉強し、想念波動の在り方に気をつけて、常に常に、神のみ心に叶う言葉使いや想念波動にしてゆく」ことに留意してゆくことが大切ではないでしょうか。神様からいただいた「すべては完璧、欠けたるものなし、大成就」「〇〇様、神性復活大成就」はいうまでもなく、「大難を小難にしていた。ありがとうございます」「や」「すべては必ずよくなる」はその言葉の使い方や例でしょう。別の言葉で言えば、すべてを明るく受け止め、明るく生きていく、さらに言えば、すべて守護の神霊に対して感謝してゆくことでしょうか。

そして、私たちが神事として行っている「光明思想徹底行」や「地球感謝行」などは、私たちが自らの神性に気づき、目覚め、強く信ずることができるようになるのに、いかに寄与しているのか。そして私たちの発する言葉の偉力をいかに高めているかが分かります。

救世主としての意識となる段階になった

五井先生、昌美先生から救世主の器としての自覚を持つようになっていますが、そのような心境になれますか。この質問に対する答えを整理してみましょ。

救世主という言葉は、釈迦、イエス、老子などの大聖人をイメージしますが、よく考えると、「人類の意識を目覚めさせリーダー」と同等の意味の言葉ではないでしょうか。そうだとすると、私たちは、救世主の心境に限りなく近づいているのではないのでしょうか。

その根拠を五井先生は『老子講義 第五講(その身を後にして身先んじ……)』のように言われているかをみてみましょう。

「今日までに聖人のような行為のできた人は、実に偉大な人であったと思う。」それは、「今日までは、まだ宇宙の運行が、地球人にそうした真理を実行させるに非常な困難をともなうような波動になっていた」からと言われています。

「ところが、今日では、宇宙の運行が、地球の位置を宇宙神の中心の中心に一段と高めあげてくれるように運行されてきている。そうした運行のもとでは、今日まで地球上の強い勢力となっていた、悪のような姿、私のいう業想念波動が、急速に消されてゆく。そして、宇宙神のみに合致した正しい心的波動をもった人々や集団が、非常に働き易い立場に浮かび上がる状態に自然になってくる。

その一つの働きかけが、宇宙人、宇宙天使の地球への援助の手となって現われてきている。この世はすべて波動の世界である。宇宙法則から外れた波動をすべて宇宙法則の軌道に乗りかえる運動が今こそ活発に行われることになるのである。」

ここで言われている宇宙法則から外れた波動をすべて宇宙法則の軌

道に乗りかえる運動は、実はすでに行われているのです。昌美先生の指導のもとに長年行われている、宇宙究極の光を降ろす行事が、それであり、それに参加することにより、私たちは、急速に進化させていただいているのです。

前項でも言及しておりますように、私たちは、「宇宙神や五井先生の地球人類救済のための大プロジェクト、大計画に組み入れられ、いよいよ始まる大難を光に変容し、限りなく小難にし、さらにはゼロにするために祈りの言霊をみずからに、そして人類のために発し続ける」大任を果たすミッションを遂げるために、すべては完璧、欠けたるものなしの環境、状況、状態に調えられてきているのです。

私たち神人が救世主の器となるには、自らの神性に気づき、目覚め、強く信ずることができ、そしてどのような状況になっても一瞬たりとも不安感や疑いが出ないように習慣づけることが第一条件でしょう。

この条件がクリアできると、宇宙の法則に乗るという項目でも、言及していますが、その場、その時々に即応した力を出してゆけるようになる、即ち内なる自分から今までのようにしていくべきかが直観として受け止め、実行していけるということでしょう。五井先生、昌美先生のお言葉を通して、救世主の器となるための意識のあり方を知ることは、それが大成したということになるのではないのでしょうか。

何故なら、私たちは、それを実現できる方法、即ち、祈り、印、真の言霊や呼吸法などを既にマスターしつつあるのですから。